

塩谷郡市医師会だより

平成17(2005)年5月30日 第38号

社団法人 塩谷郡市医師会 さくら市桜野 1319 番地 3 さくら市氏家保健センター内 Tel 028(682)3518
第 58 回定時総会 平成 17 年度医療機能分化推進委員会報告
平成 17 年度第 1 回役員会 会員特別寄稿

社団法人塩谷郡市医師会第 58 回定時総会

平成 17 年 4 月 9 日(土) 28 名の出席者と 49 名の委任状出席者により総会が成立し(会員数 99 名)午後 5 時からさくら市氏家保健センターで開催されました。

冒頭、物故された小島千恵子先生のご冥福を祈り全会員黙祷を捧げました。

尾形会長、川原事務長の会務報告後、木内議長により滞りなく議事進行し、6 時 25 分閉会しました。



第 1 号議案 平成 16 年度塩谷郡市医師会事業報告並びに収支決算の承認を求める件

西健太郎会計担当理事から説明の後、二井谷誠司監事より帳簿証票は全て適正であるとの監査報告があり、全会一致で承認されました。

第 2 号議案 平成 17 年度塩谷郡市医師会事業計画並びに収支予算の議案を求める件

西健太郎会計担当理事の説明があり、全会一致で可決されました。

第 3 号議案 社団法人塩谷郡市医師会定款変更の承認を求める件

尾形会長より栃木県医事厚生課により定款を変更した報告がありました。また、申請書類の字句修正については会長一任ということで可決されました。

第 4 号議案 財産の処分を求める件について

尾形会長より、FAX 老朽化し保守契約ができなくなったため処分をし、急を要したため、新たにリース扱いで購入した報告がありました。

塩谷郡市医師会定款第 11 条により会長専決処分した旨説明があり、可決されました。



■ シーズンで行われた懇親会

総会終了後、昨年同様会場をシーズン(さくら市)に移して懇親会が行われました。和やかで楽しいひとときでした。

平成 17 年度第 1 回役員会

平成 17 年 5 月 9 日(月)午後 6 時 30 分から、さくら市氏家保健センター内医師会事務室にて開催されました。

出席者：尾形会長・小林・戸村副会長・西会計担当理事・山田・後藤・奥山・根本・阿久津正・阿久津博・大和田・大野・二井谷・軽部監事・尾形新県理事・川原事務長



■ 議題(1) 小児救急体制について

最初に、4 月 27 日に行われた県北地区医療懇談会(仮称)について、戸村副会長より報告がありました。出席者は行政から栃木県保健福祉部(部長など 6 名) 大田原市(市長など 6 名) 那須塩原市(市民福祉部長など 3 名) 那須地区広域行政事務組合(2 名) 大学から自治医科大学(救急救命センター長) 獨協医科大学(救命医学教授) 国際医療福祉病院(病院長など 3 名) 医師会から塩谷郡市医師会(会長、塩谷総合病院長など 6 名) 那須郡市医

塩谷郡市医師会ホームページ	広報委員会編集部	医師会事務局
U R L http://www.tochigi-med.or.jp/~shioya/ M L shioya-ml@tochigi-med.or.jp	阿久津正之 akutsu@d1.dion.ne.jp 戸村 光宏 mtomura@sirius.ocn.ne.jp	川原 shioya@triton.ocn.ne.jp 坂和 sakawa@e-shioya.jp

師会（会長など5名）南那須医師会（会長など3名）栃木県医師会（会長など3名）大田原日赤病院（病院長など4名）であり、主に小児疾患の救急医療が議論された。

・二次三次医療スタッフが、一次医療の患児への対応に終夜追われる状況にあり、行政や医師会の協力で、一次でよいのか二次が良いのか、判断するシステムが出来ないか。

・二次三次医療のスタッフが、一次医療の患児への対応に終夜追われる状況にあり、行政や医師会の協力で、一次でよいのか二次が良いのか、判断するシステムが出来ないか。

・救急医療をコンビニ感覚で利用する親や市民への啓蒙も必要であろう。

・大田原日赤病院のデータから、塩谷郡市の矢板地区の患者が急増しており、塩谷総合病院の小児科医が一人体制になってことも影響あるだろう。

塩谷郡市医師会としても、小児救急体制について良い案がないかどうか、出席者全員に一人一人発言してもらったが、難しい問題であり良い解決方法は見つからず、社会活動委員会などで続けて検討することにしました。

■ 議題(2)救急車による転院転送時の患者情報について

小林副会長より説明あり、平成15年1月20日の「塩谷広域行政組合消防本部と塩谷郡市医師会との意見交換」で、救急車による転院搬送に係わる留意事項が再確認され、「転院搬送依頼時の傷病者情報」記入について、役員会で承認されました。これは個人情報保護法の例外事項に当たり、搬送時に各医療機関で記入して、救急隊員に渡すこととなります。

■ 議題(3)各種委員会の事業計画について

保険委員会

6月か7月に保険システムの説明会を予定しています。

*5月19日に清水荘ホテルで、太田県副会長と村山常任理事による保険診療と個人情報についての研修会がありました。これは集団的個別指導に代わるものです。

研修委員会

- ・学術部会 今年も公開講座を予定
- ・産業医部会 今年も産業医研修会予定

介護保険委員会

法改正の伝達講習会予定、主治医意見書の研修会継続、介護予防を絡めて説明してゆく

感染症対策委員会

老人のインフルエンザも相互乗り入れもしたい。

BCG接種が生後6ヶ月までとなり、接種漏れも相互乗り入れにしたい。

学校医を引き受けている先生方は、県医師会学校

保健部会に入会してほしい。

学校医の任免について、任用期間は2年間として町から委嘱状を発行してもらう。

学校医を決める際に、郡市医師会の推薦状をもらい委嘱状を出す。

裁定委員会

特になし

医師会誌編集委員会

氏家町史編纂の担当者より、郡市医師会史の編纂資料を参考にさせてほしいとの依頼があり、役員会で承認されました。

広報委員会

対内広報は、医師会だよりで広報活動を続けます。対外広報に関しては、下野新聞リレーコラム「かかりつけ医のココロ」などの各種委員会の活動が大変有効です。

選挙管理委員会

来年2月に役員改選の選挙あり。

会館建設検討委員会

特になし

医療機能分化推進委員会

下記に岡先生からの報告あり。

社会活動委員会

今年も妊婦さんのリーフレット配布予定。

■ 議題(4)その他

医療廃棄物処理の対応について

今年の医療廃棄物処理検討委員会にて、各郡市医師会の意見を聞くことになり、平成16年度第1回医療廃棄物適正処理検討委員会で尾形新一郎理事が述べた内容（栃医新聞掲載）を、塩谷郡市医師会の意見とすることが承認された。

尾形会長より、医療廃棄物は医師会が手を出すのではなく、行政が担当すべきであり、行政が出来ない場合に、医師会としては横の連携を取り、良い民間業者を選別し育てていく必要がある。実際に業者を変えたら3割コスト減になった話もある。

業者の情報はインターネット上にも公開されている。

テレビ会議について

日本医師会はTV会議システム導入を決めており、今年9月にも運用開始予定です。栃木県医師会としてもTV会議に慣れるために金銭的負担の少ない既存のシステム「BROBA」を利用することにした。各郡市医師会にも協力依頼あり、塩谷郡市医師会も事務局パソコンにBROBA導入が承認された。

楽しく出来る運動療法」の講演について

平成17年6月12日(日)午前10時~11時

於：矢板市公民館

第45回栃木県総合医学会について

総合医学会についてのアンケート調査に協力していただきたい。ドクターの参加者が少ないので、もっと参加して欲しい。公開講座が良いのではないかと。

平成 17 年度

塩谷都市医師会会議年間スケジュール

5月 9日	第 1 回役員会
6月 13日	第 2 回総務会
7月下旬	親睦会(暑気払い) さくら市主催
8月 8日	第 3 回総務会
9月 12日	第 2 回役員会
9月 25日	公開講座 於:矢板市文化会館
10月 11日	第 4 回総務会
11月 14日	第 3 回役員会
12月 12日	第 5 回総務会
1月 10日	第 6 回総務会
1月下旬	新年会 矢板市・塩谷町主催
2月 13日	第 4 回役員会
3月 13日	第 5 回役員会

委員会より

平成 17 年度

第 1 回医療機能分化推進委員会報告

5月16日(月)に平成17年度第1回医療機能分化推進委員会が開催されました。本年度は県の補助事業でもある「医療機能分化推進事業」の最終年度(3年目)でもあり、今後の医療機能分化推進委員会の運営のことも含めて話し合いが行なわれました。

(1) 黒須病院に医療連携用コンピューターソフト(連携くん)設置

昨年、塩谷総合病院に設置されたものと同じ「連携くん」が本年度黒須病院に設置されます。7月15日(金)から運営が開始される予定で、それに先立ち6月28日(火)に黒須病院会議室で説明会とパスワードの配布が行なわれることになりました。

(2) 医療機関情報冊子の作成

医療機関間、特に診療所と中核病院間の紹介と逆紹介をスムーズに行なうために都市医師会医療機関の診療等に関する情報をまとめた冊子を作成することが決められました。

(3) 下野新聞リレーコラム

「かかりつけ医のココロ」冊子の作成

都市医師会会員によるリレーコラム「かかりつけ医のココロ」は本年12月末まで下野新聞に連載される予定ですが、そのコラムをまとめた冊子を連載終了後に作成することが決定しました。

(4) 健康管理手帳に関するアンケート

および広報ポスターの作成

現在、各医療機関で利用している都市医師会オリジナルの「健康管理手帳」を今後どのように利用していくのかを検討するため、今年度もアンケートを実施することになりました。また、医療連携や1次、2次、3次医療などの違いを一般の方に理解してもらうためのポスターの作成が検討されました。

(5) 塩谷広域医療連携推進協議会(仮称)の設立

地域住民が安心して生活できる医療供給体制の確立を目的とした協議会の設立を広域行政に働き掛けることにしました。この協議会は医師会のみならず、歯科医師会、薬剤師会などの医療関係団体や市民団体、行政などと協力して運営することを目指しており、今後の当委員会の活動の一つと考えます。

(報告者:岡 一雄)

お知らせ

医療連携講演会および「連携くん」説明会開催

7月15日(金)より黒須病院のITを利用した医療連携「連携くん」が運営開始します。それに先立ち、医療連携講演会と説明会、パスワードの配布が行なわれますのでより多くの医療機関の代表者、スタッフの参加をお願いします。

日時:6月28日(火)午後6時30分から

場所:黒須病院3階会議室

内容:医療連携に関する講演(講師:株川原経営総合センター)

「連携くん」に関する説明会と各医療機関にパスワード配布

黒須病院連携室の紹介 など

塩谷総合病院連携室より

「連携くん」の患者情報が増えました

塩谷総合病院「連携くん」の患者情報が増えました。是非先生方より多くのアクセスをしていただけるようよろしくお願いいたします。

当院の連携システム開始時の入力状況は、受診・返書・入院・検査予定の入力だけでしたが、今年2月より紹介患者の入力情報を追加しました。

入力追加項目

手術例(術式)

病理検査結果(2週間毎)

標本の病理結果(1ヶ月毎)

次回受診の予約

また、トップページには医師の休診情報も随時入力・変更を行っております。

(塩谷総合病院:奥山和明)

【特別寄稿】

阪神淡路大震災を振り返って

風見診療所院長 小島 崇

阪神淡路大震災より十年が過ぎ、当時を振り返り一筆。

東海道新幹線が不通の為、羽田空港より岡山空港へ。札幌の脳外科医達と合流し、渋滞の解消を待つて深夜、自動車に分乗し、神戸に向う。市内に近づくにつれ、歩道上のガレキの山が、車道にはみ出しているのが目に入る。途中、立ち寄った公園では、駐車場の車や芝生のテントの中で、避難中の人達が眠りにについている様子。

震災五日目の午前二時頃、長田区役所に到着。荷物を置くやいなや、初日より奮闘を続けてこられた医師団と交代し、区役所五階に設置された救護所に待機。すでに大きな外傷者や重篤な疾患の方は、医療機関に収容されていたため、腰痛、かぜ症状、不眠等の外来者に対応する。

薬品庫となった一室には、全国より送られた薬品類が雑然と積み上げられた状態。担当の保健師さんと共に目的の薬品を探し出す。(翌日には薬剤師さんが数時間で、整理し、リストを作成されていた)

世が明け、隣の警察署の駐車場を見ると、袋詰めされた人骨が運び込まれ、検死の最中。

区役所内の電気は確保されてはいたが、水道は使えず。飲料水は、ペットボトルの形で十分に確保できていたが、水洗トイレが使用できず。近くを流れる川に土囊をつみ、出来た深みより、バケツで水を汲んでトイレに設置し流していたが、大便の際は新聞紙の上で排便し、それをゴミ袋の中に集める様に指示される。これらの処理を毎日行ったボランティアの人達には、ただただ感謝の気持ちでいっぱいでした。

又、安全の為、建物内の暖房器具の使用が禁じられており、とにかく寒い状態。区役所内の二階、三階の避難所を訪ねた際は昼間でも皆、毛布にくるまり横になったままで、ボランティアの医療班の中でも体調を崩す人が続出する。

朝のミーティングで、作業班の分担が行われる。琉球大学の外科医と共に避難所を数ヶ所、廻る。必要とされる薬品をカバンに入れ、避難所とその周囲を訪れる。その時、運転を担当してくれた方が自治医大の学生で兵庫県出身との事。期末試験が免除になったと聞き、自治医大教授連の配慮に感心する。

夕方、階段の所で胸痛を訴えた老婦人が搬入される。心電図にて心筋梗塞の疑いあり。救急車にて搬送。無事に病院に送っての帰り道、消防隊の方より震災時の話を伺う。皆、何日も風呂に入らず、黒ずんだ顔をして、防火槽に水が無く、火災を目の前にして無力だった悔しさを切々と語ってくれた。

車窓より外を見ると埼玉県警のパトカーや県外の

消防車、救急車に出会う。大きな苦しみ、悲しみの中にも胸に熱いものを感じる。

夜間、スイスの救護チームと出会う。震災直後に救護を申し出たが、政府の承認を得るのに時間を要した事を、悔やんでいる様子。彼らは、消防士、建築士、医療チームが共に行動し、まず医療拠点とすべき建物の安全性を確認し、それより行動に移す等のことを聞き感心する。

震災一週間を過ぎた頃より、ラジオにて心のケア・生命の電話・心的外傷後ストレス症候群(PTSD)などの言葉が繰り返し聴かれるようになる。その頃より、救護所窓口でも不眠、抑うつ状態、被災した自宅に入れられない等の訴えが目立つようになる。神戸大精神科医療チームが、中心となり「心のケア」に力が入られ、区役所内にもカウンセリングルームが設けられたのもその頃だった。

約一週間の経験ですが、私のいた長田区にて、全国より集まった医師、看護師、薬剤師、栄養士等を取りまとめ、適時、配置を決めていたのは医師会でも保健所でもなく、区役所の保健師さんだった。彼女達の不眠不休の活躍には、今でも頭が下がる。

その後、神戸市社協内の「障害者支援の会」として、主に障害者施設の職員と共に、様々な年齢職業の方と、行動させていただく。

震災の医療ボランティアから戻って、ひとつだけ、ずっと心にわだかまっていた事があったが、先日、中越地震のテレビ特集を見ていた時、これだったのかと気付いた。それは「ボランティアコーディネーター」の紹介番組だった。現在、全国どの地においても大きな災害が生じた時、ボランティアに応募される人々は大勢いる。しかしながら、それら、様々な人達の能力や時間的調整を含め、必要とされる時間、場所に適切に配置できる立場の人が少ないと思われる。その結果、「現場には着いたが、仕事がない」とか、せっかくの能力が生かされない結果となっていることも多いようである。

塩谷郡市の行政担当者の皆さんに提案ですが、各役場に一人、コーディネーターを設置し、常日頃訓練をしてみたらいかがでしょうか。

ちなみに今回の中越地震の際、鹿児島県の辺地の診療所より、新潟県の医療ボランティア受付に連絡をとりましたが、「市役所より要請がない」との事で断られました

(編集注・この文章は下野新聞の塩谷郡市医師会リレーコラム「かかりつけ医のココロ」の原稿として小島先生に書いていただいたものですが、コラムでは字数の制限があり全文を掲載出来ませんでした。しかしながら、阪神淡路大震災という未曾有の災害に医療ボランティアとして参加された先生の経験は是非、医師会会員にもその臨場感あふれる文章を通して追体験していただきたいと考え、医師会だよりに全文掲載することになりました。)